

【創作】

塀の短編集 ②

増田辰良

創作

## 塀の短編集 ②

増田辰良

目次  
3. 隠し金

## 3. 隠し金

——これは本当にあつた話です。ブロック塀の中から札束が出てきたのです。聞きたいですか？ 金の話なので、もちろん聞きたいですよ。じゃあ、小説ふうにお話ししましょう。

畑仕事をしようと庭に出ると、近所の子供たちがブロック塀にボールをぶつけて遊んでいた。

私は、

「塀が壊れるから、ボールをぶつけちゃだめだよ」

と、少し強い口調で注意した。

が、すでに一部、壊れていた。そこからブリキのような物が見えた。上蓋になっているブロックを持ち上げると、その空洞には縦長で弁当箱くらいの大きさのジュラルミンケースが四個隠されていた。

「なんだあ、これは？」

どのケースもカギの部分は錆付いていた。指先の力では動かない。

庭先で、金槌とドライバーを使って、こじ開けてみた。ビニール袋が出てきた。手に取ると、劣化していて袋はチリチリに砕けた。手の平には聖徳太子の万札が乗っていた。

「おお。金だ！」

私は、慌てて、そのまま玄関へ駆け込んだ。

「おい！ ちょっと来い！」

女房を呼んだ。

「どうしました？ 大きな声を出して？」

女房は大儀そうな顔をして出てきた。

「おい。これを見ろ」

「あら。お札じゃない。どうしたの？」

平然と訊き返してきた。

「ブロック塀から出てきたんだ」

「えっ？ ブロック塀から？」

「そう。子供たちがボールをぶつけて遊んでいて、壊れたところを見ると、このケースに入って……」

キーワード…ブロック塀、不動産屋、隠し金

「まあ、大変。で、いくらあるの？」

「だから、数えるのを、手伝ってくれよ」

無言のまま数えた。紙幣は万札ばかりで、一束二〇〇枚で十束あった。

「ふ。二〇〇万だ」

「そうね。本物かしら？」

「本物だろ。でなきや、わざわざ、偽札にせまをブロック塀に隠したりしないだろ」

「誰の物なの？」

「解からんよ」

「そうよね。……でも、うちのブロックから出てきたのよね」

「うん」

「ということは、うちの物でしょ」

ニヤリと笑みを浮かべ、女房の声は弾んでいた。

「お前、よく落ち着いて、そんなことが言えるな？　こんな大金を前にして……」

「だって、出てきた物はしょうがないでしょ。現に目の前にあるんだし。ブロックをうちの物にしろって、不動産屋に言われたじゃない。隣の息子だって、売るときは面倒事にならないよううち押し付けようと、不動産屋に根回ししたのよ。きつと」

「ああ。そうみたいだな。でも法的には、拾った金と同じで、警察へ届け出なければならぬ」

女房は私の最後の言葉が耳に入らなかったようで、

「誰かに見られた？」

真剣な目をして、顔を覗き込んできた。

「どうして？」

「誰かに見られてたら、きつと大騒ぎになるわよ。嘘みたいな本当の話ですもの」

「うん。子供たちにちょっと見られたような、見られてないような」

このブロック塀は、私がこの土地を買う前からあった。土地を買うとき、所有者の独居老婆から、こう聞かされた。隣家と費用をせっぱんして建てたので、両家の敷地の境界線の真ん中に建っている、と。庭木の枯れ葉がお互いの庭に入るのを慮おもんばかって、合意の上で建てたそう。ただし塀を共同所有していることを証明する書類は取り交わしていない、と。自分たちが土地を手放すときに、所有権を巡るトラブルが起こることなど頭の片隅にもなかったであろう。それほど権利意識の弱い、いや無頓着でいられた時代だったのだろう。

独居老婆は私から土地の代金を受け取ると、本州のどこか生まれ故郷へ帰ったようだ。もう、この世にはきつといないだろう。

土地を買ってから、私は古家を壊した。作業中、隣家のお爺さんが「ブロック塀も壊すのか」と訊いてきた。「残しますよ」と答えた。お爺さんは安心した素振りを見せた。更地にしないで庭木や庭石、畑も残した。在る物を生かしてやりたかったのだ。この心情はわずかなアニメズムによる。五十年かけて成長した木も電動ノコギリを使えば、三分で切り倒すことができる。そうやって生命いのちや魂のある物を死に追いやることが許せないのだ、嫌なのだ。人も物も自然と朽ちるまで生きるべきだし、生かすべきだ、と思う。

三十年の時が過ぎた。隣家の老夫婦も他界した。いや、したようだというのも、この老夫婦には成人した息子と娘が近所に住んでいるようであるが、一度として挨拶を交わしたことがない。老夫婦がまだ健在であったときには、道路縁の雪投げを手伝い、町内会の清掃や役員

の引継ぎなど、わが家との最低限の付き合いはあった。わが家を新築したときは、お爺さんが「庭に植えなさい」と数株のスズランをくれた。息子や娘は親が他界しても、家屋敷を引き払うことになっても、挨拶なしである。そんなことを期待するこちらが時代遅れなのか。なので、他界されたことは半年後の回覧板で知った。隣人として、なんとも情けない話である。

今、隣は更地になっている。相続した息子が札幌にある不動産屋を介して、誰かに売ったようだ。亡父から聞かされていたのであろう、売るときにブロック塀が境界線上にあることを不動産屋に伝え、私の前の住人が難癖を付けたから、費用をせっぱんして造った、と入れ知恵をしたようだ。私は不動産屋の営業マンから、そう聞いた。

事実を確認するために測量士がやってきた。私は敷地の面積を測らせた。塀は確かに両家の境界線上に建っていた。息子は、売却するのに共同所有する物があれば、売り難いと踏んだのだろう。また、不動産屋も転売の障害にならないよう、この際、ブロック塀の所有権と処分権を私に押し付けてきた。その契約書には大略、こう記されている。『不用になって、壊すときは私にその費用負担をしろ、また新たに塀を造るときはわが家の敷地内に造れ』と。

この内容だけであれば、採め事にしようとするれば、どこまでも採める。共同所有になっていた事実の記載がどこにもない。ましてや共同所有していた隣家の所有権を放棄する記述もない。これでは勝手に、わが家が造った物と解釈される。また、土地を新たに買う人物が所有権を受け継がない、という記載もない。こうした事例は、世の中に多々あり、もちろん裁判沙汰にもなっている。共同所有を主張してやろう、という思いもあったが、面倒事には関わりたくなかった。また共同所有を口にする、きつと、壊しましょう、という結論になったのである。

う。しかし私が住むはるか前から、この風景を見て来た塀を自然と朽ちる前に人力でもって壊すことに抵抗を感じた。物にも生命や魂がある。そうしたちよっとした豊かな感受性が自然や人間の生命を慈しむ心根を醸成する。しばしば発生している豪雨災害を見れば、それがいかに人災であったかが分ろう。人も物も自然の一部である。人は自然や物にも生かされているのだ。また私たち夫婦も歳を取って、新たに住む若い隣人のお世話になることもあるかもしれない(そんな人情を期待できる時代じゃないかな?)。夢や希望を抱いて、この地に住むのであろう、若い家族には嫌な思いをして欲しくなかった。

こう思案して、この際、ブロック塀はわが家の所有物とする契約書に署名と押印をして、不動産屋に持って帰らせた。いかにも風采の上がない小太りで中年の営業マンは、採めることを想定していたのであろうが、あっさり署名と押印をしてもらえたことに、意外な表情をして、喜んで帰っていった。

その喜色満面を見たとき、「少し時間をかけて勉強してもらった方が良かったかな?」と、私は多少の後悔と反省をした。

あれから数カ月が過ぎても、新たに隣人になるであろう人物が塀の所有権を私に認める署名と押印の付いた契約書が届かない。強引に押し付けただけでヤクザみいだ。そんな印象を与えかねない不動産屋の仕事である。

女房の心配は当たった。その日の夕方、外が騒がしくなった。二階の窓から見下ろすと、ブロック塀の所に人だかりができていた。その中の男が玄関に近づいてきた。私は急いで、階段を降りた。それと同時にインターフォンが鳴った。女房を制し、私が応対した。男は隣の亡老夫婦の息子で吉田と名乗った。私は、一瞬、緊張し、身構えた。

(大金が出てきて、堀の所有権と処分権が蒸し返されるな) 一息ついてから、玄関先へ出た。

吉田は中年で頂頭部を光らせ、下腹がやたらとダブついていた。ぞんざいな挨拶後、いきなり切り出してきた。

「金はいくら出てきたのか？」

嘘をつく訳にもいかず、

「二〇〇〇万円です」

と、答えた。

「ほうー」と、目を見開き感嘆の溜息を吐いてから、吉田は言った。

「金は、親父が隠し金として埋め込んだものです。生きているときに、そう聞きましたよ。なので、全額、自分が受け取る権利を持っている」

私は、眉を擡めた。

その表情にうまくいかないことを察したのか、吉田は弁解口調になった。

「確かに、ブロック堀の所有権は、こちらさんにあることを認めましたよ。しかし金が隠されたのは、自分の両親の時代です。そのとき、堀の造作費用はせっばんしているんで、わが家も半分出している。共同所有の書面はないが、それは時代がそうだったからで……自分が土地を相続したときは、金の件を忘れていて、気づいていけば、こちらさんへは譲渡しませんでしたよ……」

この厚顔無恥で一方的な話の腰を折り、私は確認した。

「ちょっといいですか。不動産屋が持ってきた契約書には共同所有していたはずのお宅が、その所有権を放棄したという文面がないんですよ。一方的に、私が造ったもの、という文面にしかありません。なので、お宅は共同所有者としての資格はないんですよ。堀が作られた経緯もいっさい書かれていないんですよ。あなた、その文面を見

て知っているはずですよ」

「……いえ。それは自分の知らないことです」

吉田は軽く顎を引いてからシラッと言った。

その瞬間、私はムックかつとした。

「それはウソでしょ。知っていたから、売るのに面倒事になるから、うちの物として不動産屋に吹き込んで、そういう文面にしろ、と。また、不動産屋も障害なく転売したいから、ああいう文面にしたのでしょ。私に相談もなく、そんな裏の話をあなたたちはしたはずですよ。不動産屋から、そう聞きましたよ」

「……」

強い口調に怯んだのか、吉田は答えなかった。

私は、続けた。

「どうみても、やり方が誠実じゃ、ないんですよ。あなたの人間性がまる見えです。まあ、それはいいとしましょう。私が所有権と処分権とを引き継ぎましたからね。で、今のところ、誰が隠した紙幣なのかは不明です。当然、警察へ届け出るのが筋です」

「いやいや。そんなことをする必要はない。自分が全額受け取らないとすれば、お宅と半分ずつ分け合えばいいじゃないですか。費用をせっばんして造った堀の中から出てきたのだから。ふっふっふっ」

この含み笑いに、私は腹立たしさを覚え、突き放した。

「だめです。法的には、拾得物と同じですよ」

「しゅうとくぶつ？」

「んんっ。拾った物ということですよ」

「……」

「時間をかけて検討しましょう。私も調べてみますから。それまで、理由を話して、銀行に預けておきますから」

私は、とっさにそう口にした。

「手をつけたりしないでしょかね?」

そのへらさ口蓋をしてやろうと、私は強い口調で言い切っちゃった。  
「拾った物と同じだ、と言ったでしょ。そんなさもないことはしません」

「さもない?」

「卑しい、という意味ですよ」

「……?」

翌朝、不動産屋の営業マン鈴木がやってきた。新たに土地を購入した人物が塀の所有権を私に認める署名と押印した契約書を持って来たのかと思いきや、そうではなかった。

「当社は吉田様より、この土地を買いました。よって、一時的ではあってもこの土地の上にある物への所有権と処分権を主張する権利を持っています」

「しゃあしゃあ、と要求してきた。」

「ほく。そんな屁理屈があるのですかあ?」

私はチャンチャラ可笑しいという声で返した。

「あるんです。あなたは素人だから、法律を知らないでしょ」

「でも、紙幣が出てきたのは、発見したのは、あなたの会社が土地を転売した後ですよ。もう、すでに所有権は消滅していませんか?」

まだ、契約書を受け取っていませんが、むしろ新たに土地を購入された方が主張するのであれば……」

私はあえて言いよんでみた。

「いいえ。消滅してないんです。自分は大学の法学部出身で、民法ではそう習いましたよ。ふっふっふっ」

「ほく。法学部ですかあ? 本当に?」

私は小バカにしたつもりだった。

「そうです。法学部ですよ」

鈴木は、したり顔で胸を反らせた。

「はい、はい、法学部ですね。時間をかけて検討しましょう。私も、もう少し調べてみますから。それまで、銀行に預けておきますよ」  
きっぱりと言った。

「手をつけたりしないでしょかね?」

「それじゃ私が泥棒になりますよ。そんなさもないことではありません」

「さもない?」

「卑しい、という意味です。大卒? 法学部出身ですよねえ?」  
さすがに出身大学名を聞くのは憚られた。

その二日後、私は銀行の応接室にいた。

「で、宮本君、どうなの? 誰の物になるの?」

宮本君は私の若い頃の教え子である。大学を卒業後、この銀行に勤め、今は支店長をしている。

「先生。面倒な法的手続きをしないで、何とか上手く処理したいですよね」

「そうなんだよ。ややこしくはしたくないなあ。ADR(裁判外紛争解決)すら利用したくないよ。でも、放棄した後から所有権があると  
言い張る輩が二人いるから。呆れたもんだあ」

私はテーブルに置いてくれた湯呑を口に運んだ。

「先生は、どうされたいのですか?」

宮本君は微笑を浮かべて訊いてきた。

「簡単だよ。拾った物と同じだから、警察へ持っていくだけさ……」

「それじゃあ、当行に持ち込まないでえ……業務としてじゃなく、個人的に預かっているだけですから。ふっふっふっ」

宮本君は目尻を下げて言った。

「でもな、警察へ持って行けば、即、自分の物だと言って彼らに取られかねないんだ。そういう連中さ。とりあえず、金を守らねば、と思うんだ。蹴散らすこともできるけど、それじゃ連中のためにならんだろ」

「なるほどお。先生は二十五年前の学生時代にお世話になったときの気質のままですね」

「おい。何を言いたいんだ？」

「正義の味方ってことですよ」

「それじゃ、よう解からんよ」

「禍を背負い込んで、他人には押し付けないってことです」

「私はそんな立派な人間じゃないよ」

「『賢い人間はその知恵を自分のためじゃなく、周りの人たちのためになるよう使いなさい』って、よくおっしゃってましたよ」

そう言う宮本君は微笑を浮かべていた。

「私は正論を主張しているだけだ」

真顔で強い口調になった。

「で、昨日、枚数を数えてみると、確かに、本物で二〇〇〇枚ありました。で、ですねえ……これがあ……」

「何より、宮本君。奥歯に物の挟まったような言い方をしてえ」

「ちょっと、失礼」

宮本君は席を立ち、電話機の受話器を耳にあて、誰かに指示を出したようだ。

「うんうん。そうかあ。じゃ、ちょっと持って来てくれる」

私は、また湯呑を手に取り、宮本君を見ながら飲んだ。

「先生。きっと、おもしろい結果になりますよ」  
含み笑いをしながら、宮本君は椅子に戻った。

しばらくすると、若い行員がダンボール箱を持って入ってきた。

「先生。こちらの齋藤も経済学部のOBですよ」

「ああ。そうかい」

「齋藤と申します。よろしく、お願いします」

「こちらこそ、面倒をかけてすみませんね」

私は立ち上がって、丁寧に頭を下げた。

「じゃあ、ちょっと説明してさしあげなさい」

宮本君は齋藤君を促した。

「はい」

齋藤君は箱のガムテープを剥がして中から紙幣を取り出し、テープルに置いた。

私は何が始まるんだという顔をして見ていた。

「実はですね。これは先日、お預かりした紙幣なのですが、この三〇枚ほどの、ここに通し番号と文字が一字だけ記されています」

そう言って、齋藤君は一枚、私の顔の前にかざした。

「ほ。文字が？」

見ると、確かに裏側のスカシの右肩に数字と文字が書かれていた。

「自宅で見たときは、気づかなかったなあ」

「表紙の聖徳太子ばかりを見てたんでしょ」

ニコニコ顔で宮本君が口を挟んだ。

「通し番号の順に、並べてみますね」

齋藤君は手際よく並べ終えると、

「こちらから順番に読んでみてください」

「えっ。読むの？」

「はい、読んでみてください」

齋藤君は「どうぞ」と手招きした。

万札ごとに記された文字を文章にすると、こう書いてあった。ただし、句読点は私が付けた。

『この紙幣は、このブロック塀を造るときに、埋め込んだものです。決して痰たんしいものではありません。熟慮の末、ここに埋めました。塀の造作費用は隣家とせっぱんしました。なので、塀は両家の境界線上に建っています。共同所有の書面など交わしておりません。この文章が読まれる未来には、きっと塀は壊れ、その所有を巡るトラブルが起こっていることでしょう。なぜ、境界線上に造ったのかは説明いたしません。詮せんない理由ですから。塀を造る前、ここにはオンコ(水松)が植わっていました。それを根こそぎ抜いて、塀を造ったことを終生後悔することでしょう。どうか、この紙幣を森林保護のために活用してください。紙幣の所有権と処分権は、これが発見されたときの塀の所有者に帰属します。どうかお金への執着心のない、知性の豊かな方に発見されることを願います。昭和四十六年八月一日 佐々木信子 印』

読み終えて顔を上げると、宮本君と齋藤君はドヤ顔をしていた。

「これって？」

私はトンマな顔をして、信じ難いという声を漏らした。なぜなら、佐々木信子は私が土地を買った独居老婆だったからである。

「はい。法的には、紙幣を隠された佐々木様の遺言に近いものでしょうね」

宮本君は私に向かって親指を立てて、ニコッと笑った。

「これが遺言になるかね？」

「こうして欲しいという記述と日付、署名と押印もありますし、正式な遺言書ではなくても、それに類するものとして、解釈され処理されるでしょうね。でも、佐々木様の血縁者がご存命であれば、その方にもご相談しなきゃならないでしょうが。優先して、紙幣を受け取る権利もあるでしょうし。でも、日付からすると、佐々木様ももう他界されてますよ。その血縁者ですから……」

私が土地を買ったとき、お婆さんは八十歳を超えていた。また、この地には縁者はいない、郷里には幼馴染みはいても、血縁者はいない。だから、遺産等はすべて郷里の自治体に寄付することにしている、その手続きも終えている、とも言っていた。

こうした情報を話すと、宮本君は、

「じゃあ、先生、文面にあるとおり、塀の所有者である先生が処分されればいいんじゃないですかね。文面どおりの処分をされるか、警察へ届け出るかどうかは先生のお考えを実行されればいいんですよ」

と、助言をくれた。

「そっかぁ。警察へ届け出してから、あくまでも、遺言として実行してあげればいいんだね」

私は、追認して欲しくて、訊き返した。

「それでよろしいかと思えます」

宮本君は顎に手を当て、ふむふむと頷きながら答えてくれた。

その横で紙幣を片付けている齋藤君は、  
「紙幣を、なぜ隠したのですかね？ オンコのためだけとは思えませんが、不思議がった。」

と、不思議がった。

「それを知る手掛りは……ないんじゃないかな」

宮本君が真顔で答えた。

「境界線上にある堀だから、意図的に誰かが壊して、取り出すこともできませんし」

「そんなことをよく考えた上で堀に隠したんだろうね」

そう言いながら、宮本君が私の顔を見たので、私は、答えにならない答えを聞かせた。

「私が土地を買ったとき、佐々木さんからは、堀を境界線上に造ったのはお互いの庭木の枯葉が入ることを慮って、合意の元に費用もせっぱんして造った、と聞いたよ。でも、金については一言も聞いていない。……佐々木さんにはきつと隠さなきゃいけない、それも聞いていないの中へ……深刻な事情があったんだろうね。私が土地の代金と権利書を交換したとき、隠したことすら忘れてしまっていたのだろう。ご高齢で、早く手放して、郷里へ帰りたい、帰りたい、っておっしゃってたから」

私は、紙幣の文字を文章にしたコピーをもらい、帰宅した。

玄関に入ると、すぐに女房が、

「どうでした？ 宮本さんからは、いいアドバイスがもらえましたか？」

と、心配そうに訊いてきた。

「おお。大丈夫だ。頼もしい教え子がいて、ほんと大助かりだよ。これも私の教え方、育て方がよかったんだ。はっはっはっ」

私は、詳細を説明した。

女房は、笑みを浮かべ、黙って聞いていた。

「何とかうまく解決できそうですね」

「うん」と頷いたが、それでも私は、「いや。相手は論理の通じない連中だから。まだ、波乱はあるぞ。安心できん」と、自分の気持ちを引き締めるよう答えた。

土曜日の午後、吉田と鈴木を自宅に呼び出した。屋内に招くのも頼まれた部分で、紙幣の出たブロック堀の前で説明した。二人は堀の壊れた部分をいかにも意味あり気な目付をして睨みつけていた。不意に、ブロックの小さな破片がバラバラと落ちた。

文面のコピーを見せ、読んで聞かせた。が二人は銀行員が思いついたことで、きつと私が行員に書かせたのだ、と執拗に疑った。疑いを晴らすため、私は宮本君と齋藤君に電話をして、来てもらって筆跡を確認させた。紙幣の文字は達筆で、現代の若者が書けるような、真似のできるような字形ではなかった。これは玄人でなくても、一目瞭然であった。

これがかつぱりすると、吉田と鈴木は鬼の形相に変わり、挨拶もなく、さつさと車に乗り込んだ。

「どうにもならん連中だ。さもしい限りだ」

私は、つい本心を吐露した。

「金の話になると、百八十度人格が変わる人間もいますから」

齋藤君はどうにもしようがないという口調だった。

「先生、どうされますか。早目に解決された方がいいですよ。お手伝いできることがあれば、いつでも連絡をください」

宮本君はそれとなく気遣ってくれた。

「さて、どうしたものかな。ふっふっふっ」

私は、思わせ振りの答え方をした。

翌週の月曜日、吉田と鈴木は銀行のお客様対応室にいた。

「宮本さん、三浦さんから預かっている二〇〇〇万円を出してください。法的には我々が受け取るものですから。出さないと、あんなこの銀行を誠になりませよ。それほどヤバイことしてますよ」

鈴木は目尻を吊り上げて、そう言った。

「確かに、私が個人的に預かっていますが、仕事とはまったく関係ありませんよ。三浦さんとよく話あってください。あなた方にお渡しするわけにはまいりません。今日はおひきとりください」

宮本君は丁重にお断りした。

すると、吉田がドスの利いた声で脅した。

「そんなこと言っていないんですか。裁判になると、あんた横領罪で罰せられますよ」

「そのときはそのときで考えましょう。まずは、三浦さんとお話してください。ここでは埒が明きません」

「この空気を読めよ！」

「お静かに願います。他のお客様もいらっしやいますので。んんっ。空気が読むものじゃなくて、吸って吐くものでしょ」

「……？」

「頭の中でしっかり考えてから、しゃべれ、ってことですよ」

この静かな対応に両名は面食らったようで、

「どうなっても責任を取ってもらうからな」

と、捨て台詞を残して出て行った。

その直後、私は宮本君から電話で一部始終を知らされた。

「現金は大丈夫なんだろうね」

私は、念のため訊いた。

「安心してください。紙幣は支店長室のロッカーにしまっておりません。たえ、ルパンでも強奪はできませんよ」

そう言うのと、「ふっふっふっ」と笑い声が入ってきた。

二日後、金の亡者たちから連絡がきた。一対一では不利と判断したのか、二対一での交渉となった。私は、彼らが待つカフェへ出かけた。私の姿が視界にはいると、彼らは慌ててコーヒークップを口に運んだ。

戦闘態勢を整えたようだ。

私は紅茶を注文し、静かにテーブルへ近づき、彼らの正面に腰を降ろした。

ウエイトレスが紅茶を置いて、厨房へ戻ると、二人はさっそく攻撃してきた。

「専門家の話によると、自分たちにも所有権と処分権が残っている。あっさり三等分してもいいそうだ。それが嫌なら、一千万は、あんたが取って、残りを自分たちで分けるから。それでチャラにしよう」

「宝くじの当選券を拾ったようなものだ。黙って分け合おうじゃないか。でなきゃ、弁護士を立てて、争うことになる。お互い、面倒事は関わりたくないだろ」

そう言うのと、二人は黄ばんだ歯を剥き出し、互いの目尻に浮かべた笑みをねっとりとし合った。

私は、紅茶のカップに目を落として、上の空で聞き役に徹していた。「俺たちよりも歳を取ってんだから、年金もらってんだろ、余分な金も必要ないだろ。ここは若い自分たちに譲るべきだ」

「譲ってくれば、世の中のためになるよう使うから。これだけは約束する。こっちには法律の専門家もいて訴えれば、あんたは負けるよ。法的には三人のものだからな」

紅茶を半分ほど飲み終えても、二人の口からは新しい情報、戦略は出てこず、相変わらず、トンチンカンな与太話で終始していた。

聞き飽きたころ、私は、(この糞タツレ！ 脳足リン！、と) 怒鳴りたい気持ちを抑え、

「紙幣に書かれた文面を、遺言として理解し、全額、森林保護活動をしているNPO法人へ寄付します」

と、できるだけ穏やかな口調で伝えた。

これに対して両名は、一瞬、鳩が豆鉄砲を食らったような表情をしたが、すぐに声を荒げて、猛烈に反撃してきた。私は一円も手に入れないことを約束したが、もちろん彼らは納得しない。吉田にあっては、あくまでも半額寄せ、とこれまで以上に汚い言葉で凌辱（すげ）できた。まるでハイエナだ。どんな生き方をしてきたんだ。鈴木は、これでは社に帰ると面子が保てない、幾らか寄せ、とこちらもチンプラマがいの言動に出てきた。「社が絡んでいるのか」と、問うだけバカらしく思えた。

「声が大きいです。他のお客さんがこっちを見えますよ。冷静になってください」

私は、身体を乗り出して諭した。

それにかまうことなく、彼らは私をさらに罵倒し続けた。

「聖人君主みたいなことを言うが、腹は黒いんだろ。金に手を付けたんじゃないだろうな？ よく調べてみたら、偽札だったと言って、ネコババする気じゃないのか？ 金をくれれば、自分がどこかへ寄付をしてやる。……佐々木の婆さんには、ずい分と迷惑を受けた。親父がしょちゅうばやっていた。迷惑料を払ってもらいたいくらいだ」

「現金をここへ持って来て見せてくれ。で、なきゃあ、訴えるぞ。金はいくらあっても邪魔にはならん。あんたは、そのNPOとやらとつるんでるんだろ。キャッシュバックを狙ってるんだ。金の嫌いな人間はいない。人間は金のために生きてるから」

二人の言い草に、私は腸（はらわた）が煮えくりそうになった。しかし微動だにせず、そよ風のように聞き流していた。が、堪りかねて紅茶で咽喉を潤してから、話した。

「吉田さん。世の中には、足りるを知る人間もいますよ。相続した土地を売って代金を手に入れたでしょ。不労所得ですよ。このうえ、さ

らに欲しいですか？ まだ、お若いのだし、知恵を出して一生懸命働いて稼ぎなさいよ。頭も身体も使いなさい。これは余計なことかもしれないですが、ご両親が亡くなっても、隣に連絡がないのは……社会人として、いかがなものですかねえ？ 隣に住んでいると、あなたの知らないところで色々助けあって生きてきたのですよ。家を新築したときには、お父様からスズランをいただきましたよ。毎年、春になると可愛い花を咲かせてます。そんなことは、ご存知ないでしょうが。自然と壊れたブロックの部分は、私が自腹で修復もしてきましたよ。人だけじゃなくて、物にも魂が宿ってますからね。それを大事にする心があれば、人間関係もよくなるのですがねえ。生前、佐々木さんはお宅のご両親とはうまくいっていたはずですよ。だから、せっぱんして塀を建てたのですよ。憶測で他人を悪く言っちゃいけません。ご自分の品格を下げてますよ。今のこんなあなたを見ると、亡くなられたご両親は泣きますよ。こんな男に育てた覚えはないって」

この最後の言葉に反応し、吉田は眉を吊り上げた。気まずい空気をかき消そうと、ちゆるちゆるとコーヒーを飲んだ。

次に、私は鈴木を凝視して言った。

「鈴木さん。不動産屋の営業をしているのなら、もっと法律を勉強しなさいよ。こんなことを訊いてなんですが、あなたあ、大学を出てますよね？」

「立派じゃないですが、一応、法学部を卒業しました」

「そうでしたね。あなた学生時代に脳ミソの皺を増やすよう、自分の頭で考えるような特別な勉強をしたことありますか？」

「……」

「ないですよ。だから定型的な仕事しかできないのですよ。いや、させてもらえないのです。法学部で法律を教えてもらったのであれば、

契約書の作り方、その有効性も習ったはずですよ」

「……」

「いいですか。契約書の件ですが、吉田さんとの共同所有を消滅する記載が一文ありませんよ。それを知ってるから、吉田さんがここに居て文句を言うのですよ。塀が造られた経緯は吉田さんから、お聞きになってますよね。転売するときの条件が悪くなるので、全責任を私に押し付けるようお二人で相談されたのでしょ。以前に、そうおっしゃってたでしょ。これってきれいな仕事じゃないですよ。あなたのどす黒い人格が見えます。文面を作るときは、当事者である私にも同席を求めるべきだったはずですよ。杜撰な仕事ですよ。文面も大問題です。よくまあ、あんな文面で済ませましたね。おたくの会社じゃあ、こんな商売の仕方をしてきたのですか。呆れます。塀を造ったのは、私の前の住人、佐々木さんと吉田さんの親の責任であって、その土地を私が買ったのだから全責任を負えという文面にしか解釈できませんよ。いいですか。しっかり聞きなさいよ」

「……」

「まず、吉田さんとの共同所有に関する一文を記し、それが破棄され、私が受け継ぐことになったという文面を入れないといけない。いくら私が署名し、押印をしても契約書に不備があれば、裁判すればあなた負けですよ。ここが肝心です。そんなややこしいことにならないよう私が最大限の譲歩をして塀は私の物にしたのです。すぐに署名と押印をしてあげましたよね。こんな事例はたくさんあって、裁判沙汰になっっていることくらい知ってるでしょ」

そう言うてから、私は身体を吉田に向けて続けた。

「吉田さんもいいですか。ややこしくならないよう裁判沙汰にしないように、私が配慮してあげたことを考えてくれたことがありますか。」

すんなり署名し、押印してあげたのですよ。不動産屋から、このことを聞いて、あなた、諸手を上げて喜んだでしょ」

「もろて？」

「んんっ。(このバカは意味も分らんのか?) 万歳をしたという意味です。いいですか。私の対処のいかんでは、塀を取り除く費用負担も発生しましたよね。ましてや裁判になると……。私に相談することなく、不動産屋に根回しして責任をすべて私に押し付けて、嫌な思いがしませんか? よくまあ平気でいられますね? 売って、はい、終わりじゃないですよ。こういう対処の仕方、姿勢は仕事や生活のすべての面に現れますから。金じゃなく、生き方が大切なんです。生き方が。まったくもって品性がない」

私は、最後の言葉を吐き捨てるように言った。

吉田は無言のまま、またちゅるちゅると音を立ててコーヒーを飲んだ。

その音から顔を背け、私は再び、鈴木に向かって言った。

「鈴木さん。あなた、歳はいくつですか?」

「四十五歳です」

「ご家族は?」

「子供が二人います」

バカ正直な答えが返ってきた。

「四十五歳にもなって、まだ外回りですか。部下の一人や二人いてもいい年頃ですよ」

「はっ」

「先日、来てもらった銀行員は私の大学の教員ですが、あなたと同世代で支店長を任されていますよ」

「えっ? 大学、教員子?」

鈴木は、鯨なまずのような目を見張って、私を睨んだ。

「そう。よく勉強する学生だったですよ。卒論も書いたし、司法書士と税理士の資格も取得して卒業しましたから」

「……」

「学生時代に色んな勉強をして知識を得たり、考える力を身に付けていないから、決まり決まった単純な仕事しかさせてもらえないのですよ。いまだに、外回りですからねえ。大卒の仕事じゃないでしょ。大卒という肩書きにプライドを持ちなさい」

そう言うと、私は天井に目をやった。

鈴木は思うところがあつたのだろう、首を垂れた。

ここで、沈黙の空気が舞い降りてきた。

私は内心、言葉が過ぎたかなと反省し、間をとってから静かに紅茶を飲み干した。

つられるように鈴木も指先を小刻みに震わせながらコーヒークップを持ち上げ、ずる／＼と飲んだ。

その濁音にイラッとして、私はこれが最後の忠告だと、噛んで含めるよう話した。

「家を耐久消費財として造っては壊し、壊しては造ることを繰り返している不動産開発や住宅業界に疑問を感じませんか。建物は消費されるものではなく、活用されて価値を持続するのですよ」

「……？」

「こんなリノベーション的な発想すらないまま壊しては土地を転売しているだけでしょ」

「リノベーション？」

素っ頓狂な声が返ってきた。

「前世代が築いた住環境を今の世代が受け継ぐという発想ですよ。既

にある物の価値を大切にすることです。その前に、木々を引き抜いて更地にすることは自然を冒瀆ぼうとくしている、と考えたことがありますか。木々にも生命があり、魂も宿たまってますからねえ。木々があるから、あなたも私も生きていられるのですよ。不動産屋には、もっと自然を大切にすることが必要じゃないですかね。自然から儲けさせてもらっているのだから、利益を環境保護や森林保護のために使ってください。土地を、転売して、稼いで、はい、終わりじゃあ、いい仕事、きれいな仕事はできませんよ。自然を保護することなど頭の片隅にも浮かばないのですよ。知性がないから」

「……」

一呼吸おいて、続けた。

「吉田さんだって、土地を売るときに庭木を残して、育ててくれる方に売ればよかったのですよ。お父様が大切に何十年にも渡って手入れされてきた庭木をすべて引き抜くことにはないでしょ。抜かれる木々の泣き叫ぶ声が聞こえませんか。更地にすればいいというもんじゃない。そんなことを考えながら生活をする脳ミソの皺が増えて、賢くなるんです。分かります？ ……秋になって、庭木の枯葉がお互いの庭に落ちることを気づかなくて、境界線上に塀を作られたことにご存知ですよ。共同所有の書面も作成しないまま良好な隣人関係が続いてきたじゃないですか。権利意識の強い世の中にあつてなんて素晴らしい互恵精神なのでしょう。なぜ、この精神を継続できないのでしょうか。契約書は一見、合理的であっても、互いの心に壁を築く手段ともなります。……木々たちは秋になると盛んに葉をふり落とします。それまでたくわえてきたものをすべてをふり捨て、まっさらになる潔いさよさ。何かを惜しむことも悲しむこともありません。人間も、こう生きられませんかねえ。……塀に関わる所有権はすべて放棄されたのですよ」

私は彼らの顔を交互に見ながら強い口調でこう諭した。

そんな私の勢いに圧されたのか、彼らはまさしく教師に説教される生徒のようにおとなしくなった。

もうよかろうと、私は、

「それじゃあ。この件はこれにて一件落着です。全額、NPO法人へ寄付します。もちろん、警察へ届け出て、確実に私の物になってからのことですが。寄付の手続きが終了すれば、あなたたちにも、お知らせします」

テーブルに紅茶代を置いてから、丁寧に頭を下げて、席を立った。これだけ言い聞かせても、懲りない連中である。背中に怒声の矢が刺さった。

「いい気になりやがって、これで終わりと思うなよ。こっちは余裕ねえんだ。失うものねえんだ!!」

「ただじゃ済まないぜ。この借りは返してもらおうからな! よーく覚えておけ!!」

ハンドルを握る鈴木は興奮が治まっていなかった。

「クソ! 二〇〇〇万があ。クソ!」

いつもよりはるかにスピードが出ていた。大通りの角の信号を左に曲がるため、スピードを落とそうとブレーキに足を乗せた。が、

「あれ、ブレーキが? あくあく」

黒のワンボックスカーは曲がりきれずに、煉瓦造りのブロック塀へ激突した。それを後続の大型ダンブが大きく跳ね飛ばした。

ほぼ同じ時刻、吉田のSUV車は踏み切りに差しかかっていた。

「カ〜ン〜カ〜ン〜カ〜ン〜」

すでに警報が鳴り、遮断機が下り始めていた。

「百万でもいい、なんとか取りたい……」

妄想が注意力を散漫にしていた。

一時停止することなく、車は遮断機をかくぐり、踏み切りへ突入し、停止してしまった。そこへ右側から特急列車が近づいてきた。時速八十キロ。吉田は、外へ出て緊急事態を知らせようと、ドアを開錠した。がその瞬間、列車の運転士の急ブレーキも間に合わず、車は五十メートルほど前方へ弾き飛ばされ、風除けのコンクリート壁に激突してから、横転した。

帰宅した私は、玄関ドアを開ける手を止めて、ブロック塀へ目をやった(色んなドラマがあるなあ)。

「人間が勝手に、作ってんだろ。」

そう言い返された気がした。

—— どうでしたか? これらは本当にあった話です。信じるか、信じないか、はあなたの想像力にお任せします。ふっふっふっ。

(了)

